

被災地の課題から私たちの役割を考える

宇都宮大学国際学部国際社会学科 小野塚夕佳

1. 9 か月間の被災地生活

私は、昨年度一年間大学を休学して被災地(宮城県気仙沼市)に移り住み、様々な震災プロジェクト、ボランティア、イベント等に携わった。本稿は主に、休学期間中である2012年6月～2013年3月における直接的・間接的な被災地での聞き取りをもとに作成している。現地に住むことによって得られた出逢いと、そこから見えた被災地の諸問題、まちづくりの諸問題をひとつひとつピックアップし、被災地の生の声を軸に述べていく。さらにはそれらに対する私たち若者・よそ者の役割を考察する。そして最後に、私たち若者・よそ者の役割を、私の昨年度一年間の活動と照らし合わせ、そこからまた私たちの今後の在り方を考える。

2. 東日本大震災による被災

2011年3月11日14時46分、言わずもがなこの時の出来事は日本に、そして世界に甚大な影響を与えた。生きとし生けるものすべてに「生」に対する波紋を呼び起こしたのである。その東日本大震災の最新の被害状況を、総務省消防庁が公開している被害情報を参考に図表化すると、以下の通り(図表1)である¹⁾。

【図表1】

死者	行方不明者	負傷者	全壊	半壊	一部破損	床上浸水	床下浸水	公共建物	その他	火災
人	人	人	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	件
18,493	2,689	6,217	128,801	269,675	756,814	3,352	17,454	21,257	75,272	330

さらに、この大震災による岩手、宮城、福島三県からの避難者数については、右(図表2)を参考にしてほしい²⁾。

県名	避難者数(人)
岩手県	1,627
宮城県	7,981
福島県	57,135
合計	66,743

【図表2(2013年2月7日現在)】

この避難者数は、特に福島県からの避難者が考慮されているとは言い難い。福島原発事故の影響で、他県に比べてはるかに福島県の避難者数は多いが、計上されていない自主避難者を含めれば、10万人を優に超えるだろう。現在でもこういった避難生活を続けている避難者が、慣れない土地でひっそりと暮らしているのである。

これだけ多くの避難者がいる現状の中、どれだけ彼らの声を聞く機会があるだろうか。そして、彼らの声が反映されてきたのだろうか。次からは、私が見聞きしてきた経験を通して、今現在の被災地の諸問題を挙げていく。

3. 被災地の諸問題と隠れた被災地の声

被災地における諸問題として、ここでは「人と人との問題」、「震災遺構に関する問題」、さらには「復興に重要である復興予算に関する問題」を取り上げていく。

(1) 仮設住宅入居者と、非入居者の軋轢

今回の大震災により、様々な形の被災があった。家族を失った人も居れば、家を失った人、職を失った人もいる。そのような中、家を失った人が入る仮設住宅に焦点を当てる。そこで見えてきた問題は、仮設住宅の入居者と非入居者の意識の差である。非入居者であり、家が残った人からすれば、入居者が「お風呂に追い炊き機能が欲しい」「防音設備が欲しい」「もっと支援してほしい」といったような要望

を出すのは、単なるわがままに聞こえるかもしれない。しかしながら、入居者側からすれば、家を失ったことで、あらゆる大切なものも失くしたのである。ましてや元々一軒家に住んでいた人々が、突然 4.5 畳の部屋と 6 畳の部屋しかない仮設住宅に住むことになったら、動揺するのは目に見えている。さらに、収納スペースがないため、畳んだ洋服をしまうスペースもないのである。

上記のように非入居者と入居者が互いに不満を抱いていることは決して少なくない。他にも被災直後から数か月の間、様々な支援があったとき、家が残った人たちは支援を受けられないケースが多かったと聞く。家の残った被災者が支援の列に並んだとしても、「あんたんとは家は残ったんだからいいばい」と言われてしまうのである。親密なコミュニティがゆえの一種の問題である。互いの状況がすぐにはわかってしまうことから生まれる監視の目のようなものが存在するのである。確かに家は残ったが、だからといって食料が足りているとは決して言えないであろう。しかし「家が残った」「家を失った」というだけで、双方が線引きをできてしまっているのである。それが、震災から 2 年が経過した今でもなお続いている障害である。

(2) 被災建造物—保存か解体か—

大震災の被害を受けたのはもちろん人間だけではない。また、動植物だけでもない。それは建造物などもすべて同じなのである。そこで、宮城県気仙沼市に打ち上げられた大型漁船「第十八共徳丸」をピックアップしよう。

「第十八共徳丸」は、全長 60 メートル、総トン数は 330 トンの大型巻き網漁船である³。この大型漁船は、震災当時定期検査のため気仙沼港に寄港していた。人間に例えるならば、この船も偶然居合わせた気仙沼で被災した、紛れもない被災者なのである。気仙沼港から内陸へ約 750 メートルも流され、もともとは鹿折唐桑駅前であった場所に今でも打ち上げられている。本来ならば、周囲にあったガレキや漁船と同様撤去されるはずだったが、あまりの大きさのため動かすことができずにいたのである。

この第十八共徳丸を保存するか解体するかという議論はこれまで長い間され続けてきた。そしてついに 2013 年 6 月 25 日に、「船主も儀助漁業(福島県いわき市)は 6 月 21 日、NPO 法人『シップリサイクル室蘭』と解体契約を結んだ。」⁴という報道がされた。船主が解体を決めたのである。これまでも船主は解体する意向を述べていた。しかしそれに対しての気仙沼市の対応は「共徳丸を残したい」、という意思を伝えるのみで、何ら行動を起こしてこなかった。

共徳丸を保存するか解体するかという問題に対する地域住民の声として、まず「今すぐに解体してほしい。見るだけで辛くなる」というものがある。それは、この共徳丸によって家が破壊されたり、町が壊されていく様子を見たことから生まれる自然な感情であるだろう。しかし先ほど述べたように、この共徳丸もれっきとした被災者である。そうであるのに、なぜあたかもこの共徳丸が町を破壊していった“壊されるべき悪者”のように言われるのだろうか。

「解体してほしい。」という意見に対してはもちろん「震災遺構として今後保存していきたい。」という声がある。この声の根本には、第二次世界大戦で投下された原子爆弾の経験による地域の在り方が大きく関わっていると考えられる。なぜなら、第二次世界大戦で広島と長崎には世界で初めて原子爆弾が投下された。その辛い記憶を後世に残し、二度と同じ過ちを犯さないため、広島では原爆ドームを保存することに決めた。同じようなことがこの共徳丸でも言えると考えられるのである。辛い記憶を少しでも忘れたと思う事は人間として当たり前である。そして震災遺構として残すには、莫大な費用がかかることとなる。しかしながら、その辛さを伝え、後世に活かす事を疎かにすることは、後世の子孫が危険に晒される可能性を引き上げるだけなのではないだろうか。

(3) 復興の遅れと復興予算の流用

諸問題のうちの最後に、復興の遅れを挙げる。1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災と比べて、明らかに東日本大震災の復興状況は遅れている。それは被災地に住む人々が毎日ひしひしと感じていることであり、中には「私たちは中心から離れた辺鄙な場所に住んでいるから、きっと国から捨てられるんだべ」という声も上がっている。それに呼応するかのよう復興予算の流用問題が明らかになっている。2013年6月3日に報道された復興予算の流用問題は、「復興予算の1000億円がウミガメ保護」や「ご当地アイドルイベント」に使われたというものだった⁵。それほかにも復興予算で空自操縦訓練や被災地とは関係のない自衛隊駐屯地の浴場の建て替えなどに支出していたり⁶、復興予算が被災地とは無縁の事業に流用され、自治体などの基金に対し、政府が返還を求めたのは約1千億円で既に使われた1兆円余りは返還されない⁷、といった流用問題が取り上げられていた。

被災地に住む人々は、2年以上が経っても復興のビジョンが見えてこない現実に愕然としている。震災で出たガレキはおおよそ片づけられたが、まだ手の付けていない建物がないわけではない。さらには家の基礎の部分だけが剥き出しになったまま、解体待ちをしている土地が数えきれないほど存在する。その光景を毎日見て、進まない復興の中でも彼らは立ち上がり、独自のやり方で人を呼び込み、町を明るくするために努力しているのである。それに対しての自治体や県、さらには国が、復興のための予算を流用するなど、人としてあるまじき行為に被災地の人々は憤りを隠しきれない。

4. 震災について考え、感じること

上記でいくつかの被災地における諸問題を見てきた。このほかにも数えきれないほどの問題が山積みになっている。こういった諸問題に関して、私たち若者、そして被災地以外に住むよそ者ができることは一体何なのだろうか。

まず、一つ目の問題として挙げた、被災地の人と人との問題である。これは、私たちのような外部の者が仲介役として入っていくことで改善する問題であると考えられる。何故なら内側の人間だけでは見えてこない部分が、外部の者が参入することで見えてくる場合が多いからである。ましてや若者がどんどん流出してしまっている被災地で、若者が進んで町の人に声をかけて支えようとすることは、彼らにとって大きな力となり得る。

第二の問題点としてあげた震災遺構に関する問題に対しては、私たちがもっと被災地における上記のような問題に関心を持つことが求められている。何よりも怖いことは、私たちがこういった問題に対して無関心であることである。無関心である人に被災者からメッセージを送ることは、関心のある人に対するそれに比べてはるかに労力がかかる。被災地に住んでいなくても、こういった課題に対して問題意識を持ち、発言していくような生活をすべきである。

第三の問題としてあげた、復興の遅れと復興予算の流用問題に関しては、私たちは普段から政府や自治体に対して監視の目を光らせなければならないということを示唆していると言える。私たちはそういった悪用をするような機関を直接訴えることはないにせよ、それらに働きかけることはできる。流用問題が浮き彫りにされれば、それを追求し、排除していく必要がある。そういった役割を、私たち若者やよそ者、国民全体で行っていかなければならない。

5. 被災地生活から現在—震災を忘れない—

最後に、私が被災地に住んで活動してきて感じたこと、考えたことを通して、上記の私たちができる

ことと照らし合わせながら、今の自分たちが果たすべき役割を視覚化しようと思う。

はじめに述べたように、私は 2012 年度の一年間を、大学を休学して被災地宮城県気仙沼市で過ごした。その間、「東日本大震災を忘れない」という想いを、キャンドルを通してカタチにしていく心の支援と、被災地の雇用支援を行っている「ともしびプロジェクト～被災地に希望の光を灯し続けよう～」⁸をはじめ、津波で流された大漁旗を保存し、全国からのメッセージを集める「大漁旗プロジェクト」、仮設住宅に縁台を設置する「縁台設置プロジェクト」⁹など、様々な震災復興プロジェクトに関わった。他にもイベントの際に炊き出しをしたり、様々な種類の支援活動やボランティア活動が続ける人と関わり、普段の生活ではほとんど触れる事のない世界を経験した。そういった中で、全国各地から被災地にやってくる人や被災地に暮らして支援を続ける人など多くの人に出逢い、つながっていくことの重要性を体感した。また、よそ者である私を快く迎え入れ、家族同然に接してくれた気仙沼市民の温かさも痛感した。

これらの経験と私に関わってきた人から見聞きしたことから、まず第一に、これは若者だけとは限らないが、まだ被災地へ足を運んだことのない人には特に、一度しっかりと被災地を直視する時間を設けるべきと考える。被災地の声として、「多くの人に、ちゃんと自分の目で見てほしい」というものがある。私も 9 か月間被災地に住んでみて、一度も見たことのない人に今の被災地の現状を伝えるのは相当難しいことを痛感した。まさに百聞は一見にしかず、である。被災地を見て、現地の人と交流して、そこから初めて自分たちの役割を考えることができるのだと思う。さらにそうすることで、外部からの一方的な支援を防ぐことができるのではないだろうか。

第二に、今後ますます減少していくと考えられる報道に頼らず、自ら進んで被災地の情報を得ようとする姿勢を持つことが重要であると考え。震災から 2 年以上が経った今、どれだけの数の震災に関する報道がなされ、どれだけの数の震災特番が組まれているのだろうか。私自身ここ最近テレビで震災に関する映像を見たことがない。そのことから、特に被災地以外に住む人の中で震災を考える時間がさらに減っていくことが予想される。今回の災害を二度と繰り返さないためにも、メディアは語り継ぐ役割を果たし、メディアがそういった場所・時間を作り続けるように、私たちは監視の目を光らせ続け、そういった報道を求めていかなければならない。

第三に、直接被災地に赴いたりすることができず、第二で述べたように震災に関する情報量が着実に減ってきている今、私たちは「震災、被災地そして被災者を忘れない」という強い想いを持つことが重要であると考え。特にこの宇都宮大学が在る栃木県は、海なし県という事もあり、津波被害はこの先も絶対にありえない。また台風が直撃するような地域とも言い難い。そのことから、県全体として自然災害に疎いという問題点を抱えているように感じられる。そんな栃木県民がいざ、津波が起こり得る地域、台風の直撃する地域に移住した時、彼らは柔軟な対応をすることができるのだろうか。「震災、被災地そして被災者を忘れない」というのは、震災が現実世界のものだということを知ることだけではなく、今後起こるかもしれない不測の事態に備える事なのである。過去に学ぶという行為は、人間が必ず行わなければならない行為である。

最後に、私たちが果たすべき役割として「語り継ぐ場所の提供」を挙げる。上記の被災地の課題として挙げた共徳丸に関連して、第二次世界大戦における原爆ドームを具体例としたが、ここでもその経験が活かされるのである。第二次世界大戦を幼いころに経験した人が、今では 70～80 歳になっている。彼らは未だに、戦争の事を言い伝える。同じように、この東日本大震災を幼いころに経験した今の子供たちは、60 年後、70 年後にもこの震災の事を話しつつけるのである。今の私たちが現実を直視せず、

震災を考えることから逃げてしまったら、彼らの語り継ぐ場所、機会を誰が提供するのだろうか。語り継ぐ彼らを支え、ともに後世を守っていくという大きな役割を担っているのではないだろうか。

1 総務省「平成 25 年 3 月 26 日 平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)(第 147 報)」より作成

<http://www.fdma.go.jp/bn/higaihou/pdf/jishin/147.pdf>

2 同「平成 25 年 3 月 26 日 平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)(第 147 報)」

3 「地震・防災 あなたとあなたの家族を守るために」より作成

http://www5d.biglobe.ne.jp/~kabataf/higasinihonn_daisinnsai/miyagi_kesenuma_syasin.htm

4 「第 18 共徳丸の解体契約に市役所は反発 震災遺構として残すべきか？」

http://www.huffingtonpost.jp/2013/06/23/18th_kyotokumaru_n_3485396.html

5 「復興予算、流用 1000 億円 ウミガメ保護にご当地アイドルイベント」

http://www.huffingtonpost.jp/2013/06/02/reconstruction_budget_of_the_great_east_japan_earthquake_n_3376157.html?utm_hp_ref=fb&src=sp&comm_ref=false

6 「復興予算で空自操縦訓練 2012 年 10 月 6 日」

http://www.jcp.or.jp/akahata/aik12/2012-10-06/2012100601_01_1.html

7 「復興予算流用の背信 公表を 2013 年 6 月 26 日」

<http://www.asahi.com/opinion/articles/TKY201306250300.html>

8 『ともしびプロジェクト～被災地に希望の光を灯し続けよう～』は、現在一般社団法人『Nr.12』が運営する震災復興プロジェクトである。仮設住宅に住む被災者の不安な声「忘れられることが一番怖い」という言葉を聞いたことをきっかけにして、毎月 11 日にキャンドルに火を灯して、「忘れない想いをカタチにしよう」という活動を行っている。このプロジェクトの本部である宮城県気仙沼市では、こういった心の支援をはじめ、被災者を雇用する雇用支援、イベント等を行っている。私は昨年度の休学期間中、このプロジェクトの事務局兼キャンドル制作を担当し、日々活動した。現在は宇都宮市にてともしびプロジェクト宇都宮支部を立ち上げ、毎月 11 日に「震災を忘れない」をテーマとしたキャンドルナイトを開催したり、プロジェクトの広報活動を行っている。

9 『仮設住宅縁台設置プロジェクト』は、埼玉県にある NPO「HORIZON」が運営しているプロジェクトである。この活動のきっかけは、仮設住宅入居者が洗濯物を干す際に、竿に手が届かずわざわざ一度外に出て洗濯物を干さなければならない光景を目の当たりにしたことである。また、仮設住宅の敷地内にベンチ等があまり置かれていないため、散歩の途中で地べたに座り込んでいるお年寄りが目立ったことも理由の一つである。私は数回だがこのプロジェクトに携わり、仮設住宅の入居者とともに縁台作りに励んだ。普段は仮設住宅に引きこもりがちで外に出てこない入居者が外に出て一緒に作業をしたり、あまり関わることのなかった入居者同士が会話を楽しんでいたりなど、単に縁台を作ることが目的なのではなく、その行為を通じて新たな友好関係を生む付加価値のあるプロジェクトである。現在も夏から秋を中心に作業が続けられている。